

かしこいクルマの使い方

Vol.5

藤井 聡



「クルマ、安いつてホント？」

例えば、平日の昼間、夕食の支度のために、何キロか離れたスーパーに買い物に行こうと考えているとしましょう。そのスーパーへはもちろんクルマで行けませんが、バスでも行けるものとしましょう。こんな時、皆さんはクルマかバス、どちらを使いますか？

おそらく、ほとんどの方が「クルマ」とお答えになるのではないのでしょうか。クルマの方が早いし、いつでも出発できますし、その上、次のようにお考えになるかもしれません。
「ガソリン代なんてたかがしれている。だけど、バスだったら何百円もかかってしまう。クルマの方が、断然、経済的」

でもちょっと待って下さい。確かに、クルマの方が便利でしょう。でも、クルマの方が安い、というのはホントなのでしょう？

普段、気になるのはガソリン代くらいかもしれません。でも、オイルやタイヤ

は定期的に換えないといけないし、保険や税金や車検代だって定期的に必要です。そして当然ながら、最初にはクルマの購入費が必要です。これらを全て考慮すると、例えば「中古で買った一〇〇〇CC程度の小型のクルマを、儉約しながら利用する」という条件でも、ざっと計算すれば一日あたり二千円程度になります。これに加えて、違反を犯してしまえば罰金が必要ですし、車体を「擦ったり、ぶついたり」してしまえば修理代が何万円、何十万円とかかります。そして大きなクルマの場合には保険も税金も高いですから、場合によっては、一日あたり三千円、四千元にもなってしまうかもしれません。これでは、毎日タクシーを使う方が安くあがりそうです。

そうなのです。確かにクルマは便利です。しかし、そのためにかなりのオカネを支払っているのです。ところが、私たちは、購入時や車検時に「まとめて」払っているのので、その「高価さ」に気がついていないのです。例えばたくさんクルマを持つ代わりに一台減らして、上手に「バス」を使うようにすれば、家計はずいぶん助かるかもしれません。なんとと言っても、バスは、一日数百円で済みますから・・・

へいじい・さとし

東京工業大学教授、1968年奈良県生駒市立高等学校卒業、JAFMATE「交通百葉箱」2001〜2002年に連載、2004年フジテレビ「交通バラエティ・日本の歩き方」(月曜日7時〜8時)監修・出演。

世界バス紀行



中村 文彦

色使いでわかりやすく

東京のJRの山手線、中央線、京浜東北線などは電車の色で識別ができます。東京の地下鉄も路線毎に色が決まっています。車両や駅のデザイン、いろいろな案内にも活用されています。バスはどうでしょうか。

海外のいくつかの都市では、色を上手に使っています。バス会社毎の色分けではなく、路線毎の色分けです。今回は、オランダの人口20万人もない小都市ドルトレヒトでの例です。

港に面して昔からの街が広がり、その奥に鉄道駅があります。鉄道線路をこえてさらに進むと郊外住宅地が広がります。ドルトレヒト市では、市内のバス路線を再編するときに、バスを、郊外住宅地と鉄道駅を結ぶ路線、鉄道駅と昔からの街を結ぶ循環路線、病院や福祉施設を循環する路線、の3種類に整理しました。のバスは急行ルートと呼ばれ緑色に、のバスはシティールートと呼ばれ白色に、そしてのバスはサービスルートと呼ばれ青色に、それぞれ塗られたバスが運行しています。バス停のデザインもそれに呼応しています。すべてのバスが中央駅に集約していて、乗継券も発行されるので、一度の乗り換えで市内のどこへでも行けることとなります。

路線網が明快なコンセプトでわかりやすくなっていると、路線図もそれほど必要でないし、バスででかけようという気持ちもより高まるのだらうと思います。

もっと大きな都市ですが、路線の役割をバスの色で表現している例は、韓国のソウルやブラジルのクリチバなどがあります。それらについてはまたの機会に。



中村 文彦 (なかむら ふみひこ)

横浜国立大学大学院工学研究院教授、
東京大学卒業、専門は都市計画、都市交通計画、公共交通政策など